(2)　『水』の配置方針

○「水の都」をアピールする多様な水の表現

・「森の都」とともに熊本の代名詞の一つである「水の都」を、広域玄関口である地区内で表現する。

・多くの人が集う場では心地よさを与える水面、歩行者軸ではせせらぎ、来街者が集う駅至近部では湧き水や水飲み場など、見るだけでなく五感で楽しめる活用方法も展開する。

○地区の歴史・文化を感じる水の活用

・石塘堰や坪井川、白川といった地区内の水に関連する資源の歴史・文化を再確認し、水との関わり方をアピールする。

『水の都』の由来

○熊本市は、阿蘇外輪山西麓の山地･丘陵部などでかん養された地下水により、市内の上水道用水を１００％まかなっており、「水の都」と呼ばれている。

○市内の水前寺、江津湖は、熊本を代表する湧水地で、熊本城とともに観光地であるばかりでなく、市民のやすらぎと憩いの場として親しまれている。

■身近な公園など多様な水利用

博多市内

井戸を活用した手動ポンプの防災用水 兼 遊び道具。
公園や隅切り等の辻空間（公共用地や公開空地）へ配置

■西口利用者の憩い空間

サンクトペテルブルク

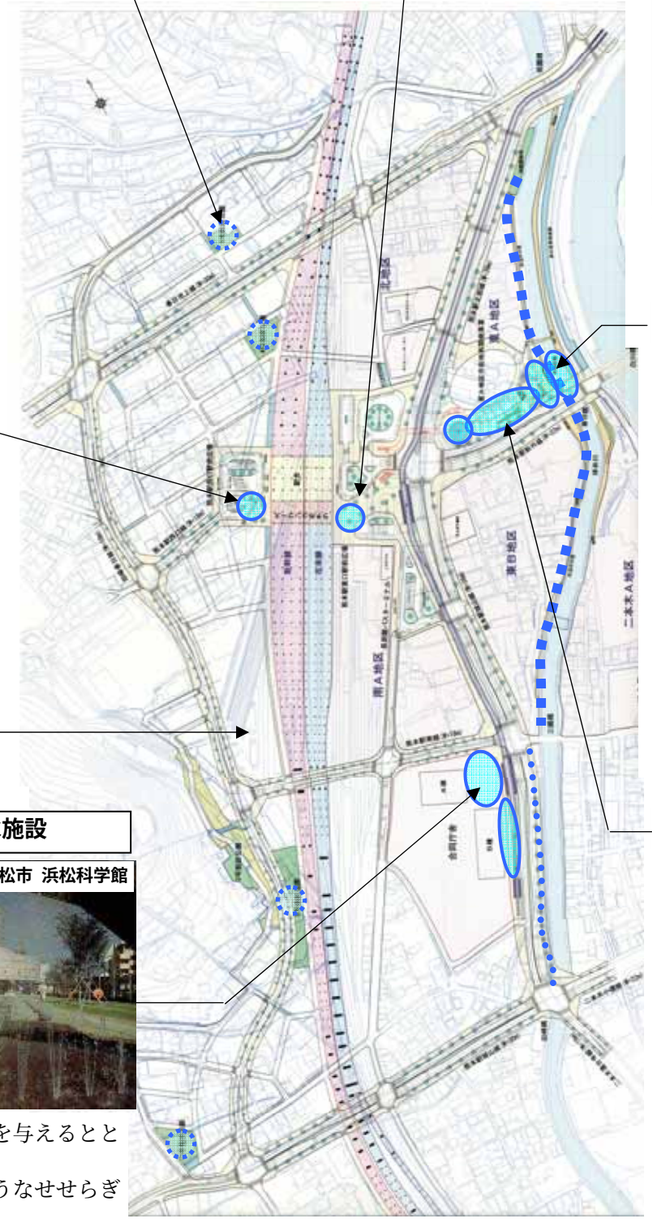
水音、水面、しぶき、様々な水の表情と共に、目印になる親水施設

■建物への軸線を創り出す親水施設

さいたま市 ｿﾆｯｸｼﾃｨｰ

浜松市 浜松科学館

整然とした都市広場（公開空地）に潤いを与えるとともに軸線を形成
城山線沿いの線状公開空地は、庭園のようなせせらぎにより対比を形成



■豊かな水を象徴する親水施設

名古屋市

水が溢れ出るイメージ、ボリューム感のある噴水

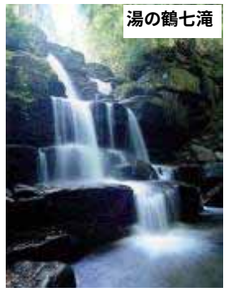
■水に触れ、水を眺める親水空間

白川水源

アメニティ軸の水の演出の終点として、坪井川水面を眺め、活用し、石塘堰などを活用した水辺の広場を形成

■動と静を結ぶ多様な水の表情

通潤橋用水円形分水


湯の鶴七滝

轟水源

法面や段差階段を用いた、様々な水の表情を見せる親水空間。

(3)　『歴史・生活文化』の配置方針

○心安らぐふれあいが感性に響く、どこかホッとする熊本の表現

・まちづくりの理念に、「水と緑の自然や歴史性を活かしたまちづくり」が示されている。

・県都の玄関として考えた場合、歴史性には、県や市の歴史性、地域の歴史性、この二つが挙げられる。

・これら両者の資源の要素を活用し、熊本としての個性や魅力を形成する。

○地区の歴史・生活文化を感じる資源の活用

・石塘や石塘堰などの歴史、また、市民生活の中で広まった歌謡や伝承、これら熊本市域を中心とした資源の歴史・文化を再確認し、それらを活用してまちづくりに展開する。

■地域の伝承を再現

交通センター前
おてもやん像

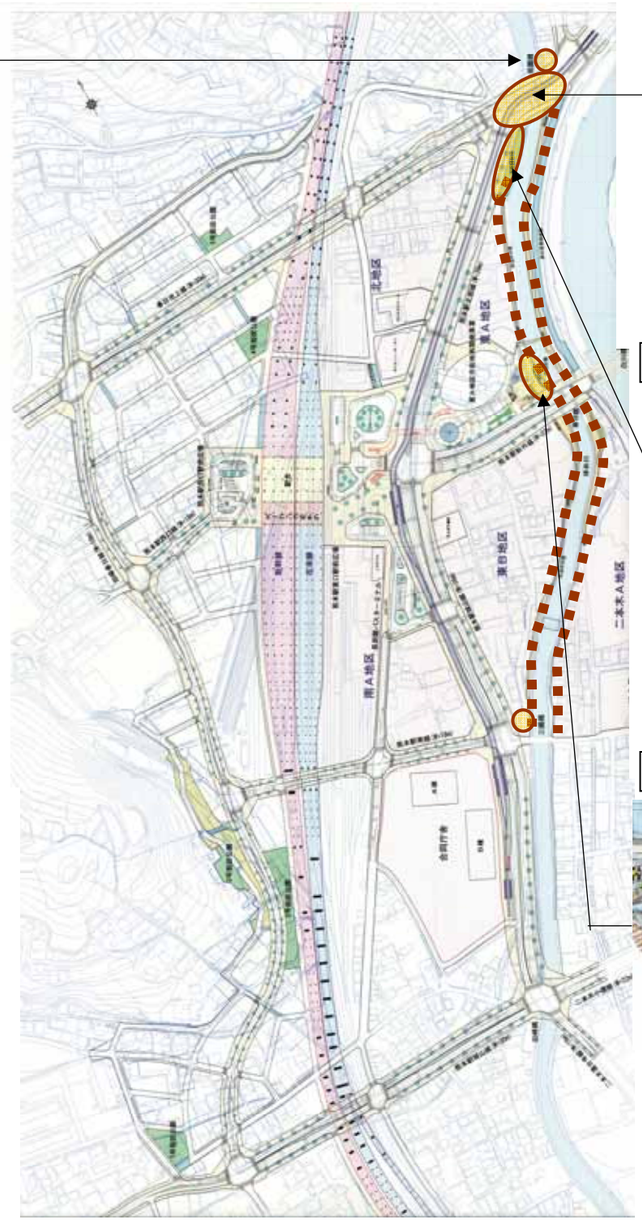
地域の謡曲伝承に基づく造形物の設置

■坪井川を活用した歴史文化の軸づくり

石塘、石塘堰といった石の文化などの歴史的なつながりを、坪井川緑道などを活用して中心部（熊本城や城下町）との軸を形成

■地域の歴史を展開

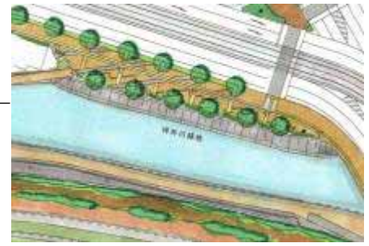
旧月星化成工場やＪＲ敷地内にあったレンガ建築物を地域の歴史の一端としてとらえ、公園・広場など場所性を考慮しながらレンガを再利用



■街の記憶の再現

祇園橋再整備にあたり親柱を再現し、街の記憶をとどめる

■石塘を眺め歴史を感じる空間



対岸からも見られることに意識し、石塘や緑が映える空間構成としている。

■石塘堰を活用した水辺の広場

近代化遺産である石塘堰を遊べる親水施設に活用。

〈参考〉「熊本らしさ」の探求

１．風土「森と緑」

■　明治２９年４月、第五高等中学校の教授として赴任した夏目漱石が、人力車で池田駅(現上熊本駅)から五校に行く途中、京町あたりで町並みを眺望し、「森の都だな」と言ったことから、熊本を『**森の都**』と称するようになったと言われる。
今も、イチョウやクスノキ、サクラ等、四季折々変化に富んだ緑に恵まれている。

夏目漱石が「森の都だな」と言われた場所の現在風景

■　熊本の植生概要

県内の樹木分布は、標高 800m を境として、上部が落葉樹、下部が針葉樹に分布される。

人々が利用してきた里山では、シイ、カシの林が多い。

山間渓谷では、ケヤキ、カツラ、イロハモミジ、モミ、ブナが見られる。

阿蘇の火口周辺では、ミヤマキリシマの群落が見られる。

海外近くでは、クロマツ、シャリンバイ、マサキ、トベラの低木、モッコク、ヤマモモ等の高木が多い。

市街地では、エノキ、ムクノキ、センダン等が多い。

熊本城周辺の緑

水前寺成趣園の庭園

江　津　湖

熊本市内花畑公園の大樟

心地よい空間形成への「森＝緑」の活用

「森の都」のイメージは、心地よい『熊本らしさ』を形成する重要な要素の一つ

この「森＝緑」をどのように、駅周辺の空間にデザインするか、都市基盤施設としての身近な植物と捉えて緑の展開を図る。

空間デザインでは、ボリューム感や重厚感、圧迫感等、樹木が空間の印象に影響を与える樹形に十分留意し、下記の可能性を想定する。

①ランドマーク…大きな緑の塊により、空間に抑揚を与えるランドマークを構成する
②連続する緑…森の都の連想として、街路樹と庭木により連続する緑の面を構成する
③盆系的な緑…処々に特徴ある緑の塊を配置し、空間にアクセントを構成する
④草原の緑…阿蘇に広がる草原の緑を熊本らしさの一つと捉えてイメージを展開する
⑤森の連想…豊かな熊本の自然を表象すべく、木製材の施設構成により森の連想を構成する

■具体的な展開策

○　ランドマークとなる高木
　　→　駅前広場内のバスターミナル等
○　連続する緑
　　→　街路樹並木、公開空地、回遊拠点(緑地)
○　盆景としての緑
　　→　アメニティ軸、・回遊拠点(緑地)・合同庁舎脇公開空地・街角・公開空地
○　草原としての緑
　　→　公園・合同庁舎前広場
○　森の連想による構造物への展開
　　→　駅舎や駅広大屋根への木製トラス等の構成

森（緑）　の　表　情

①ランドマーク

京稜中学校前

第一高女跡楠木

②連続する緑の面

熊本城周辺

熊本県庁前

③特徴あるポイント的な緑(盆景的)

宮崎駅前広場

熊本市役所前

④草原の緑

阿蘇山：草原の例

水前寺成趣園：起伏の例

⑤森の連想

阿蘇小国ドーム

苓北町民ホール

２．風土「湧水」

水前寺成趣園

江　津　湖

轟　水　源

白　川　水　源

■　阿蘇が育てる地下水

阿蘇カルデラの西方に立地する熊本市は、全国でも稀な湧き水の多い地域で、豊富な地下水源がいくつもあり、上水道の水源はすべて地下水で賄われており、日本一おいしい水道と言われる。

湧水量は、江津湖と浮島だけでも約２億８千万㎥／年に達する。

阿蘇カルデラの西部、外輪山から熊本市にかけて広がる台地は阿蘇西麓台地と言い、阿蘇山の噴出した火砕流が固い岩盤の上に積み重なりできた地層である。

その台地の末端を利用して熊本城が造られている。

この火砕流堆積物は、透水性が高いため、台地が巨大なスポンジのように地下水を蓄えている。

熊本の水源の中でも、轟水源、白川水源、菊水水源、池山水源、４箇所は環境庁の名水百選に選ばれている。

心地よい空間形成への水の活用

湧水のまち熊本＝「水の都」　→　『熊本らしさ』を形成する重要な要素の一つ

何気なく日常的に見る水を、熊本の個性としての水に捉え、様々な水の表情を所々で見せることで「水の都」を発信し、熊本らしさの具現化に活用する。

空間デザインでは、水を見、音を聞き、自然を味わうことを基本に可能性を想定する。

①湧き出す湧水　…噴砂や水紋、豊富に湧き出す泉をイメージした憩いの空間の構成
②豊富な熊本の水…こぼれ、溢れるほど豊富な水の表情を見せる構成
③感性に響く水　…水の表情を見、音を聞く様々な構成
④滴る盆景の水　…街角の小さな空間に、清々しい水の滴りを構成
⑤流れ、落ちる水…様々な表情を見せるカスケードやせせらぎの構成
⑥おいしい水　　…自然の中で新鮮さ、おいしさを想像させる構成

■具体的な展開策

○　感性に響くランドマーク親水施設
　　→　駅前広場内
○　連続的で多様な表情のカスケード
　　→　アメニティー軸・再開発敷地外構・親水広場
○　川の歴史文化
　　→　親水広場・回遊拠点(緑地)・水辺の小径
○　湧水イメージとせせらぎ
　　→　合同庁舎脇公開空地
○　井戸利用による噴砂の水源イメージ
　　→　街角空間や公園
○　もてなしの水飲み場
　　→　駅前広場、回遊拠点、親水広場　など

湧　水　の　表　情

白川水源

噴砂・水紋

通潤橋用水円形分水

分ける・こぼれる

諏訪水源

溢れる・湧き出る

轟水源

つなぐ・滴る

菊池渓谷

流れる・滑る

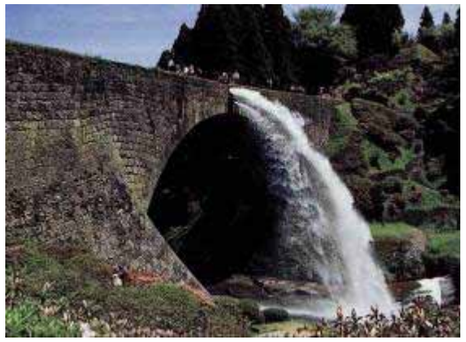
湯の鶴七滝

叩く・落ちる

阿蘇高森町

おいしさ

３．風土「石」


国の重要文化財　通潤橋　溶結凝灰岩

国の重要文化財　霊台橋　溶結凝灰岩

熊本城　城壁　安山岩・溶結凝灰岩

熊本市石塘護岸　安山岩･溶結凝灰岩

熊本市霊巌洞　安山岩

人吉市石水寺　門　溶結凝灰岩

■熊本の石材の概要

九州は、火山活動の活発な地域であり、その置き土産として、火砕流の堆積物が固まってできた岩石(溶結凝灰岩)が多く見られる。

この石は、比較的加工しやすく、硬く強いため、古くから加工石材として使われ、石の文化を育んでいる。

石垣、石塀、石碑、墓石の他、城壁、護岸、堰、石橋、礎石等の比較的大きな構造物にも使われている。

また、マグマが溶解状態から冷えて固体に変化し、岩石となったものを火成岩という。

火成岩の中でも地殻の表層で固化したものの一部を安山岩あるいは玄武岩という。

阿蘇火山ではこの安山岩も多く産し、熊本城の石垣や石塘等にも使われ、古くから熊本特産の土木材料と言うことができる。

玄武岩には柱状節理による個性的な六方石が景観材として見られる。

心地よい空間形成への「石材」の活用

溶結凝灰岩や安山岩・六方石の質感と色彩 ＝ 『熊本らしさ』の一要素

石橋のアーチ形態は『熊本らしさ』の一要素

石材のゴツゴツ整形した形態は『熊本らしさ』の一要素

石材は、地場産材として古くから多くの構造物や庭石等に使われている。熊本の石材の特徴は、凝灰岩や安山岩、玄武岩の、暗く、重々しい、やや華やかさに欠ける見え方である。

石材の使用は、地場産に無い石種や石形を用いる場合は、細心の注意を要す。

下記に熊本に馴染みの少ない石の色彩・材質・形態を示す。

石材はアクセント材や修景材として、また、存在感のあるポイント的施設の構成材としての活用がふさわしい。

■具体的な展開策

○　造形物材
　　→　オブジェやランドマーク、造園的な景石　等

○　路面材
　　→　歩道路面のアクセント材や敷石　等

○　街具材
　　→　ベンチや駒止め、サイン土台　等

○　土木構造物
　　→　護岸や土留擁壁　等

○　構造物の修景材
　　→　コンクリート表面の修景　等

古くから使われている熊本産に近い素材

熊本駅前広場内　安山岩

市役所別館周辺歩道　玄武岩

近年使われている熊本産に近い素材

熊本港周辺　玄武岩(六方石)他

市内　玄武岩(六方石)

近年使われている熊本産に馴染む素材

市電軌道敷石　花崗岩(赤・錆系色)

市電軌道敷石　花崗岩(赤・錆系色)

行幸橋周辺　花崗岩(赤系色)

熊本博物館前　花崗岩(黒系色)

４．生活文化「近世」

熊本城
　三層六階、高さ 32m、各階共、軒下部分にのみ白漆喰壁を残し、あとは黒の下見板で囲われ、全体に黒を基調として重々しい印象に構成されている。
　この白壁といぶし瓦のラインが黒板壁とのコントラストにメリハリをつけている。

乱れ積みと打ち込みはぎ
　熊本城は、清正公石垣と言われる豪壮優美な石垣で知られる。
　自然の石目に沿って矢板を打ち込み石を割って使うため、形が不整形となり、そのため石組みの間に込め石を入れて堅固にした。
　この石垣の形式を「乱れ積み」といい、込め石を「打ち込みはぎ」と言う。

長　　塀
　延長 240mの坪井川に沿った塀
　黒色の下見板を腰高に張った白漆喰壁の塀。
　城内には長塀を支える石の支柱が立ち、支柱と塀は貫で固定されている。
　現在、熊本城のシンボルの一つとなっている。
　国指定重要文化財

町　屋
　江戸時代の町割を残す古町に現存する町屋
　坪井川を背にし、平入りの木造２階建ての伝統的町屋で道路側の開口部には木製の竪格子が連続して取り付けられ、水平線が強調されたデザインとなっている。

熊本城の屋根瓦
熊本城の瓦は、台風に備えて屋根瓦を白漆喰で固めるのか特徴となっている。
瓦は熊本産のいぶし瓦で、漆喰は、貝灰と海藻を煮てつくる糊を用いている。

■　熊本城

　熊本城は、市の中心部に位置する「森の都」のシンボルとして、またランドマークとして存し、その荘厳さから日本三名城の一つといわれる。
　宇土櫓など 13 の建物が国の重要文化財に指定されている。
　別名「銀杏城」と言う。
　熊本城の最大の特徴は、石垣の美しさと言われる。
　石垣には上部に行くにしたがって反りがきつくなる「武者返し」が施され、それ故美しい曲線が描かれている。

歴史表現を用いた修景のため、
熊本城や水前寺公園の色彩・素材・形態への活用

城下町 熊本 和の様式＝『熊本らしさ』を形成する重要な要素の一つ

　全国的に知名度の高い熊本城・水前寺公園、これらの和の様式性をデフォルメ(造形的に変形する)して、公園や広場の施設の、色彩、材質、形態に活用することが考えられる。

■具体的な展開策
○　アクセントのデザイン
　→　広場や公園、街角等、部分的なアクセントとして
　　緑、白、黒、バランスの良い色彩構成への展開
　　塀や柵へ、デフォルメした長塀の展開
　　塀支えの支柱石の、列柱オブジェへの展開
　城の石垣の、土留擁壁への展開
　　公園、広場の案内板や遊び道具への展開

旧細川刑部邸
屋根のかけられた邸宅内の井戸
県の重要文化財

旧細川刑部邸前
石垣の上の長塀と、石畳
緑と黒、白のコントラストが美しい

水前寺公園内の井戸
石樽から湧き出る水が、清楚で清清しい。

水前寺公園内古今伝授の間の高札
和の様式に溶け込む案内板

水前寺公園内古今伝授の間の門
趣のある門

５．生活文化「近代」

旧制第五高等学校　校舎　国の重要文化財。

旧制第五高等学校　表門。

旧制第五高等学校　科学実験場。

小泉八雲、夏目漱石が教鞭をとった旧制第五高等学校施設。
校舎は、明治２２年（１８８９）に完成。赤煉瓦の優美な姿を今もとどめている。

熊本市内最初の本格的鉄筋コンクリート造り 2 階建、地下 1 階の建造物。大正８年建築　国の登録建造物
1 階腰板部分と軒下部分に白色大型タイルが貼られ、中間に茶系タイルを配置して、コントラストを演出している。

熊本地方裁判所資料館
明治 41 年建築
レンガ壁に白石で装飾し、アクセントをつけている。

地域文化の記憶表現を用いた修景のため、
土木・建築構造物の素材への活用

市民の街の記憶　レンガ建物　→ レンガの素材と色彩 ＝　『熊本らしさ』の一つ
石塘や石塘堰 →　石　の素材と色彩 ＝

耐火建築構造では、近代になって和様式の土蔵から洋様式の耐火煉瓦表層に換わり、全国的にひろまる傾向にあった。

熊本市内外にもレンガ建造物は数点見ることができる。

特に、旧月星化成熊本工場や熊本駅操車場建物等、かつては駅に隣接して多くのレンガ建物が日常的に見られるものであった。

日常生活の中で気にされることなく存在する近代遺産、石塘や石塘堰は、土木構造物の文化史として貴重な施設である。

空間や施設を構成する素材への活用が考えられる。

■具体的な展開策

○　アクセントのデザイン
　→　街路や広場や公園、街角等の公共基盤だけでなく、建築物ファサードの演出材として
　・路面パターンへのデザイン展開
　・街具施設のアクセントとしてデザイン展開
　・建物のアクセントライン等へのデザイン展開

駅周辺の施設　旧月星化成熊本工場

駅周辺の施設　石塘堰

郡築二番町樋門(熊本市外の土木構造物)
昭和 12 年に新設されたもので石造 3 連アーチの樋門である。長さ 14.2m、幅 8.2m。
国の登録建造物

三角西港　国指定建造物(熊本市外の土木構造物)
明治 20 年６月に竣工した我国初の本格的な近代港湾施設。
背後の土地利用と一体的に配置された港湾として価値が高い。
明治の三大築港、三角西港、三国港（福井県）、野蒜港（宮城県）のうち、当時の姿を残すのは本港のみ。

明治 4 年(1871) 外人教師の住居として建設。熊本における洋館建築第 1 号。県指定の建造物
コロニア風と呼ばれる様式をとっている。

電車通りに面した中国風の美しい建造物で、熊本では歴史ある古い書店。国の登録建造物
　木造 2 階建、外壁はレンガ壁とし、2 階の連続したアーチや軒廻りの装飾等に特色がみられる。